

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Rethinking Kenminsei (Prefectural Personalities) : Regional Variations in the Japanese Personality as Indicated by the Sentence Completion Test

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 祖父江, 孝男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004496">https://doi.org/10.15021/00004496</a>

## 県 民 性 再 考

——文章完成法テストにあらわれた  
日本人パーソナリティの地域差——

祖 父 江 孝 男\*

Rethinking *Kenminsei* (Prefectural Personalities):  
Regional Variations in the Japanese Personality as Indicated  
by the Sentence Completion Test

Takao SOFUE

Since 1965 the author has been conducting cross-cultural studies of the personality of Japanese, Americans, Italians and Eskimos, using the Sentence Completion Test [SOFUE 1979]. Statistical analysis indicates that there are clear and meaningful differences between these ethnic groups. Considerable regional variations in personality exist within Japan for some items examined, whereas others vary only slightly. In general, variation is far less clear than expected.

Research data indicate that the *kenminsei* (prefectural personalities) discussed frequently by the general public seem to exist, although they are not particularly distinct and should not be overstressed. Frequently, *kenminsei* are merely either stereotypic images or ideal patterns of expected behavior, rather than psychological patterns.

- |             |                 |
|-------------|-----------------|
| 1. はじめに     | 3. 比較分析の結果      |
| 2. 統計的処理の結果 | 4. 県民性をめぐる基本的問題 |

### 1. はじめに

筆者は1965年以来、日本人、アメリカ人(白人、黒人)、イタリア人、エスキモーについて文章完成法テスト (Sentence Completion Test 略称 SCT) を実施し、このテ

\* 国立民族学博物館第1研究部

表1 構成的文章完成法テスト (KSCT-G)<sup>1)</sup>  
**Table 1. Sentence Completion Test (KSCT-G) compiled by**  
 Y. Kataguchi *et al.* 1964

検査のやり方：以下のページにしり切れとんぼの文章が印刷してあります。この文章を使って、空欄のところに文章をつづけてください。文章の上手、下手を気にしないで、最初に頭に浮かんだことを記入してください。どうしても文章が浮かばないときには、その項目に○をつけておいて、あとからうめてもけっこうです。時間の制限はありませんが、できるだけ早く記入してください。なお、正しい答とか、誤った答とかいうものは全然ありませんから、自由に思いつくままに記入していただきたいのです。

1. 父についての最初の思い出は
2. 母といるときかんずるのは
3. 男の人にあうとき、私は
4. あの女のひと<sup>2)</sup>に対して私がとった態度は
5. 人にあってたいていかんずることは
6. 人から命令されると、私は
7. 父といるときいつもかんじたことは
8. 母についての最初の思い出は
9. あの男のひと<sup>3)</sup>に対して私がとった態度は
10. 女の人にあうとき、私は
11. 人に紹介されるとき、私は
12. 権威のある人は
13. 人にかからかわれたとき
14. 他人が私を好いていないとかんずるとき
15. 欲しいものが手に入らないとき、私は  
(問 16-18 は除去)
19. 人から批判されたとき、私は
20. 人が私を相手にしてくれないとき
21. とてもできそうもないので、私は  
(問 22-24 は除去)
25. それがうまくゆかなかったわけは
26. 私がおそれているのは
27. 私の気がふさぐのは
28. わるいことをしたと思うのは
29. 私がよく空想するのは
30. 私の心からの願いは
31. 私がとても不満に思うのは
32. いちばん心配になることは
33. 私がひげ目をかんずるのは
34. 私が罪悪感をもつのは
35. そうできたらよいとたびたび思うことは
36. 何よりも必要なのは

1) 不許複製 (著作権所有者東京ロールシャッパ研究会)  
 2),3) もともとこの第4問と9問はそれぞれ“彼女に対して……”, “彼に対して……”となっていたのであるが, “彼”および“彼女”という語は中学生などの間においては, そして特に村落地帯においては“恋人”というような特殊のニュアンスをもっているのでこのように修正した。

ストにあらわれた各 ethnic group のパーソナリティについて比較研究を試みてきた。なお被験者は中学3年生に統一し（エスキモーの場合はそれに近い年齢の者）また用いたテストは片口安史ら東京ロールシャッパ研究会の作製した構成的文章完成法テスト（KSCT-G型）で、その内容は表1に示す通りである。この結果についてはすでに3つの論文のなかで発表している〔祖父江 1969, 1977; Sofue 1979〕。これらのなかで第1の論文〔1969〕はアメリカ人と日本人を対比させ、更に同じ日本人でも地域によってどうパーソナリティが異なるか、すなわち県民性といったものがどうあらわれているかについて論じたものである。第2の論文〔1977〕はその後に入手したイタリア人のデータを日本人およびアメリカ人と比較させながらその特質を論じたものであり、さらに第3の論文〔1979〕においては、これにエスキモーの資料を加えて日本人、アメリカ人、イタリア人、エスキモーという4つの ethnic group を相互に比較した。

これらの諸研究のなかで、第2、第3の論文においては、日本人、アメリカ人、イタリア人の3グループを比較するにあたってカイ自乗検定を用いて厳密な分析を行っている（但しエスキモーは事例がごくわずかであるため、統計的取扱いはしていない）が、これらより数年前に著わした第1の論文〔1969〕においてはカイ自乗検定などの統計的処理は行なっていなかった。

筆者が文章完成法テストを用い始めたのは日本人の県民性の調査に関心を抱き、比較的短時間に多くの地点で多くのデータを集めることができるからという事情によるのであって、そのため県民性について一般読者むけに書いた筆者の著書〔祖父江 1971〕のなかにもこのテストの結果を紹介して、県民性を論ずる際のひとつの資料としたのである。しかし先にも記したように、この資料は厳密な統計的処理を経ないままのものであり、その意味では明らかに不完全なものであった。そこでこの資料についてカイ自乗検定を行ない、文章完成法テストにあらわれた県民性の特色を再評価してみようというのが本稿の目的に他ならない。

したがって本稿で取り扱った文章完成法テスト結果の原資料はさきにあげた私の第1番目の論文〔1969〕のなかですでにとりあげられているものばかりであり、国立民族学博物館のコンピューター（IBM-370/138）の上で統計パッケージ（SPSS—Statistical Package for the Social Sciences）を使用して解析を行なった。こうした操作を行なうにあたって種々の御助力を頂いた同博物館研究部の栗田靖之、山本順人その他の方々に厚く御礼申しあげたい。

## 2. 統計的処理の結果

筆者が今回取り扱ったのは、次に示す諸項目に対する反応の分布である。

- 問2「母といるときかかぬのは」
- 問7「父といるときいつもかかぬことは」
- (男子の場合) 問10「女の人に会うとき私は」
- (女子の場合) 問3「男の人に会うとき私は」
- 問14「他人が私を好いていないとかんずるとき」
- 問25「それがうまくゆかなかったわけは」

1969年の論文においては以上の他に「対人態度と反応様式」の全体についての総括を行ない、その分布についても検討しているが、これについては、ふりかえってみるとその分析方法に種々の問題点が存在しているため、ここでは省略し、上にあげた5つの質問項目についてだけとりあげることにした。これらの各項目に関する反応の分布はそれぞれ表2～表6に示されている通りである。ここで表2～表4における P, Nu, Na, Np はそれぞれ、肯定型 (Positive type), 中間型 (Neutral type), 否定・積極型 (Negative-Active type), 否定・受動型 (Negative-Passive type) をあらわした

表2 問2「母といるときかかぬのは」に対する反応分布  
**Table 2.** Distribution of Responses to Q2 "When I am with my mother I feel"

		P	Nu	Na	Np
<b>都市 (City)</b>					
Tokyo	{ M	75.9(22)	13.8( 4)	6.9( 2)	3.4( 1)
	{ F	62.5(30)	15.2( 7)	17.4( 8)	2.2( 1)
Kochi	{ M	55.2(32)	22.4(13)	6.9( 4)	15.5( 9)
	{ F	81.8( 9)	0 ( 0)	0 ( 0)	18.2( 2)
<b>村落 (Village)</b>					
Iwate	{ M	64.9(24)	21.6( 8)	2.7( 1)	10.8( 4)
	{ F	65.8(25)	21.1( 8)	2.6( 1)	10.5( 4)
Akita	{ M	56.3( 9)	25.0( 4)	0 ( 0)	18.7( 3)
	{ F	75.0(21)	21.4( 6)	0 ( 0)	3.6( 1)
Niigata	{ M	73.1(19)	11.5( 3)	3.9( 1)	11.5( 3)
	{ F	69.6(16)	30.4( 7)	0 ( 0)	0 ( 0)
Yamanashi	{ M	56.3(27)	27.1( 3)	10.4( 5)	6.3( 3)
	{ F	70.0(21)	16.7( 5)	10.0( 3)	3.3( 1)
Okayama	{ M	83.3(20)	8.3( 2)	4.2( 1)	4.2( 1)
	{ F	69.4(25)	19.4( 7)	8.3( 3)	2.8( 1)
Saga	{ M	53.8(21)	23.1( 9)	10.3( 4)	12.8( 5)
	{ F	66.0(35)	15.1( 8)	9.4( 5)	9.4( 5)
Okinawa	{ M	47.1( 8)	23.5( 4)	17.6( 3)	11.8( 2)
	{ F	73.1(19)	7.7( 2)	15.4( 4)	3.9( 1)

表3 問7「父といるときいつもかんじたことは」に対する反応分布

Table 3. Distribution of Responses to Q7 "When I am with my father I feel"

		P	Nu	Na	Np
都市 (City)					
Tokyo	{ M	53.3(16)	26.7( 8)	10.0( 3)	10.0( 3)
	{ F	59.5(22)	10.8( 4)	16.2( 6)	13.5( 5)
Kochi	{ M	48.1(26)	22.2(12)	9.3( 5)	20.4(11)
	{ F	54.5( 6)	9.1( 1)	9.1( 1)	27.3( 3)
村落 (Village)					
Iwate	{ M	57.9(22)	23.7( 9)	7.9( 3)	10.5( 4)
	{ F	28.6(10)	2.9( 1)	5.7( 2)	62.9(22)
Akita	{ M	20.0( 3)	33.3( 5)	20.0( 3)	26.7( 4)
	{ F	34.6( 9)	34.6( 9)	23.1( 6)	7.7( 2)
Niigata	{ M	58.3(14)	12.5( 3)	8.3( 2)	20.8( 5)
	{ F	36.4( 8)	18.2( 4)	22.7( 5)	22.7( 5)
Yamanashi	{ M	52.2(24)	28.3(13)	10.9( 5)	8.7( 4)
	{ F	53.6(15)	7.1( 2)	21.4( 6)	17.9( 5)
Okayama	{ M	39.1( 9)	30.4( 7)	8.7( 2)	21.7( 5)
	{ F	38.3(12)	38.2(13)	17.6( 6)	8.8( 3)
Saga	{ M	40.0(14)	31.4(11)	20.0( 7)	8.6( 3)
	{ F	34.6(18)	25.0(13)	9.6( 5)	30.8(16)
Okinawa	{ M	50.0( 7)	14.3( 2)	28.6( 4)	7.1( 1)
	{ F	38.7(12)	19.4( 6)	16.1( 5)	25.8( 8)

表4 異性に対する態度の分布 (男子では問10, 女子では問3に対する反応)

Table 4. Distribution of Attitudes toward the Opposite Sexes (Distribution of Responses to Q10 in the case of male subjects and those to Q3 in the case of female subjects)

		P	Nu	Na	Np
都市 (City)					
Tokyo	{ M	35.7(10)	21.4( 6)	0 ( 0)	42.9(12)
	{ F	31.6(12)	36.8(14)	10.5( 4)	21.1( 8)
Kochi	{ M	14.5( 8)	31.0(17)	7.3( 4)	47.2(26)
	{ F	9.1( 1)	9.1( 1)	9.1( 1)	72.7( 8)
村落 (Village)					
Iwate	{ M	27.2( 9)	24.2( 8)	0 ( 0)	48.6(16)
	{ F	13.5( 5)	40.5(15)	0 ( 0)	46.0(17)
Akita	{ M	6.2( 1)	18.8( 3)	0 ( 0)	75.0(12)
	{ F	8.0( 2)	52.0(13)	4.0( 1)	36.0( 9)
Niigata	{ M	15.4( 4)	34.6( 9)	0 ( 0)	50.0(13)
	{ F	21.9( 5)	30.4( 7)	8.7( 2)	39.0( 9)
Yamanashi	{ M	27.3(12)	40.9(18)	0 ( 0)	31.8(14)
	{ F	12.5( 3)	62.5(15)	4.2( 1)	20.0( 5)
Okayama	{ M	28.6( 6)	38.0( 8)	4.8( 1)	38.6( 6)
	{ F	8.7( 2)	60.9(14)	0 ( 0)	30.4( 7)
Saga	{ M	8.9( 4)	31.2(14)	2.2( 1)	57.7(26)
	{ F	7.6( 4)	34.0(18)	0 ( 0)	58.4(31)
Okinawa	{ M	5.6( 1)	0 ( 0)	0 ( 0)	94.4(17)
	{ F	3.7( 1)	14.8( 4)	11.1( 3)	70.4(19)

表5 問14「他人が私を好いていないと感ずるとき」に対する反応分布

Table 5. Distribution of Responses to Q14 "When I feel that people do not like me, I"

		P	Nu	Na	Np
<b>都市 (City)</b>					
Tokyo	{ M	26.6(8)	16.7(5)	23.3(7)	33.3(10)
	{ F	39.6(17)	11.6(5)	9.3(4)	39.6(17)
Kochi	{ M	18.3(11)	36.6(22)	8.3(5)	36.6(22)
	{ F	25.5(3)	16.7(2)	16.7(2)	41.7(5)
<b>村落 (Village)</b>					
Iwate	{ M	25.0(9)	33.3(12)	27.8(10)	13.9(5)
	{ F	25.0(8)	21.9(7)	9.4(3)	43.8(14)
Akita	{ M	23.1(3)	46.2(6)	23.1(3)	7.7(1)
	{ F	17.4(4)	34.8(8)	21.7(5)	26.1(6)
Niigata	{ M	29.2(7)	20.8(5)	33.3(8)	16.7(4)
	{ F	27.6(7)	15.4(4)	46.2(12)	11.5(3)
Yamanashi	{ M	24.0(12)	24.0(12)	30.0(15)	22.0(11)
	{ F	21.4(6)	35.6(10)	25.5(7)	17.8(5)
Okayama	{ M	37.5(9)	37.5(9)	12.5(3)	12.5(3)
	{ F	39.4(13)	15.1(5)	24.2(8)	21.2(7)
Saga	{ M	19.5(8)	41.5(17)	24.3(10)	14.6(6)
	{ F	21.8(12)	29.1(16)	14.6(8)	34.5(19)
Okinawa	{ M	22.2(4)	33.3(6)	16.7(3)	27.8(5)
	{ F	19.2(5)	15.3(4)	34.6(9)	30.6(8)

表6 問25(英訳版では問19)「それがうまくゆかなかったわけは」に対する反応分布

Table 6. Distribution of Responses to Q19 "I could not do it because"

		Id	Io	Nu	Ei	Es
<b>都市 (City)</b>						
Tokyo	{ M	75.9(22)	0(0)	13.8(4)	10.3(3)	0(0)
	{ F	75.0(30)	2.5(1)	15.0(6)	7.5(3)	0(0)
Kochi	{ M	84.0(42)	4.0(2)	4.0(2)	8.0(4)	0(0)
	{ F	80.0(8)	10.0(1)	10.0(1)	0(0)	0(0)
<b>村落 (Village)</b>						
Iwate	{ M	77.4(24)	9.6(3)	6.5(2)	6.5(2)	0(0)
	{ F	89.3(25)	0(0)	0(0)	10.7(3)	0(0)
Akita	{ M	45.5(5)	0(0)	27.3(3)	27.3(3)	0(0)
	{ F	75.0(15)	10.0(2)	5.0(1)	10.0(2)	0(0)
Niigata	{ M	69.2(18)	11.5(3)	7.7(2)	7.7(2)	3.9(1)
	{ F	70.8(17)	16.7(4)	0(0)	12.5(3)	0(0)
Yamanashi	{ M	68.9(31)	2.2(1)	24.4(11)	4.4(2)	0(0)
	{ F	63.3(19)	3.3(1)	23.3(7)	10.0(3)	0(0)
Okayama	{ M	90.5(19)	9.5(2)	0(0)	0(0)	0(0)
	{ F	87.5(14)	12.5(2)	0(0)	0(0)	0(0)
Saga	{ M	90.3(28)	6.5(2)	0(0)	3.2(1)	0(0)
	{ F	63.9(23)	5.6(2)	13.9(5)	13.8(5)	2.8(1)
Okinawa	{ M	75.0(9)	8.3(1)	8.3(1)	8.3(1)	0(0)
	{ F	68.0(17)	0(0)	8.0(2)	24.0(6)	0(0)

もの。なおカイ自乗検定にあたっては便宜上 Na と Np を合わせて合計した値を求め、この値と P, Nu の計 3 つの値について比較を行なった。また表 6 の問25「それがうまくゆかなかったわけは」の場合における Id, Io, Nu, Ei, Es はそれぞれ内向・内層型 (Introversive-Deep type), 内向・外層型 (Introversive-Outer type), 中間型 (Neutral type), 外向・個人型 (Extroversive-Individual type), 外向・社会型 (Extroversive-Social type) である。これの場合にも便宜上, Id と Io の合計値, Ei と Es の合計値をそれぞれ求め、これら 2 つと Nu との 3 つの数値について比較を行なった。なおいずれの表においても数字は%, カッコ内の数字は実数をあらわしている。また

表 7 問2「母といるときかんずるのは」に対する反応の状況  
(地域間における有意差の存在を\*と\*\*で示す)

Table 7. Responses to Q2 "When I am with my mother, I feel"  
(Significant differences between regional groups are indicated by \* and \*\*)

[M]

	Tokyo (city)							
Kochi (city)	—	Kochi (city)						
Iwate	—	—	Iwate					
Akita	—	—	—	Akita				
Niigata	—	—	—	—	Niigata			
Yamanashi	—	—	—	—	—	Yama-nashi		
Okayama	—	—	—	—	—	—	Oka-yama	
Saga	*	—	—	—	—	—	—	Saga
Okinawa	—	—	—	—	—	—	*	—

[F]

	Tokyo (city)							
Kochi (city)	—	Kochi (city)						
Iwate	—	—	Iwate					
Akita	—	—	—	Akita				
Niigata	*	*	—	—	Niigata			
Yamanashi	—	—	—	—	—	Yama-nashi		
Okayama	—	—	—	—	—	—	Oka-yama	
Saga	—	—	—	—	*	—	—	Saga
Okinawa	—	—	—	—	*	—	—	—

これらの分類法その他の詳細については上にあげた3つの論文を参照されたい。

こうした方法によって行なったカイ自乗検定の結果が表7～表11に示した通りである。先に記した5つの項目に対する反応の分布の状況を都市については東京と高知、村落については岩手、秋田、新潟、山梨、岡山、佐賀、沖縄の7地区をとり、これらの相互間の差について検定を行なった。なお男子は男子どうし、女子は女子どうし別々に比較を行なっている。またこれらの表において、—は、二つの集団の間に有意差のないこと。\*は5%の水準で有意差のあること、\*\*は0.1%の水準で有意差のあることをそれぞれ示している。

表8 問7「父といるときいつもかんじたことは」に対する反応の状況  
(地域間における有意差の存在を\*と\*\*で示す)

Table 8. Responses to Q7 "When I am with my father, I feel"  
(Significant differences between regional groups are indicated by \* and \*\*)

[M]

	Tokyo (city)								
Kochi (city)	—	Kochi (city)							
Iwate	—	—	Iwate						
Akita	—	—	*	Akita					
Niigata	—	—	—	—	Niigata				
Yamanashi	—	—	—	—	—	Yama-nashi			
Okayama	—	—	—	—	—	—	Oka-yama		
Saga	—	—	—	—	—	—	—	Saga	
Okinawa	—	—	—	—	—	—	—	—	—

[F]

	Tokyo (city)								
Kochi (city)	—	Kochi (city)							
Iwate	*	—	Iwate						
Akita	*	—	*	Akita					
Niigata	—	—	—	—	Niigata				
Yamanashi	—	—	—	*	—	Yama-nashi			
Okayama	*	—	**	—	—	*	Oka-yama		
Saga	—	—	*	—	—	—	—	Saga	
Okinawa	—	—	*	—	—	—	—	—	—

表9 異性に対する態度の状況（男子では問10，女子では問3に対する反応の状況。地域間における有意差の存在を\*と\*\*で示す）

Table 9. Responses to Q10 ("When I meet a woman, I") in the case of male subjects and those to Q3 ("When I meet a man, I") in the case of female subjects (Significant differences between regional groups are indicated by \* and \*\*)

[M]

	Tokyo (city)								
Kochi (city)	—	Kochi (city)							
Iwate	—	—	Iwate						
Akita	—	—	—	Akita					
Niigata	—	—	—	—	Niigata				
Yamanashi	—	—	*	**	*	Yama-nashi			
Okayama	—	—	—	*	—	—	Oka-yama		
Saga	*	—	—	—	—	**	—	Saga	
Okinawa	*	*	*	—	*	—	—	—	

[F]

	Tokyo (city)								
Kochi (city)	*	Kochi (city)							
Iwate	—	—	Iwate						
Akita	—	*	—	Akita					
Niigata	—	—	—	—	Niigata				
Yamanashi	—	*	—	*	—	Yama-nashi			
Okayama	—	*	—	—	—	—	Oka-yama		
Saga	*	—	—	—	—	*	—	Saga	
Okinawa	**	—	*	**	*	**	**	—	

### 3. 比較分析の結果

以上の表7～表11にあらわれた結果を概観するにあたり，これと比較するため，文章完成法テストの同一項目に対するアメリカ人，イタリア人の反応を日本人のそれと対比させて統計的に処理した結果[祖父江 1979: 29-44]をわかり易くあらわして見たのが表12である。

なおこの表について理解して頂くため，各項目にあらわれた日本人，アメリカ人，

表10 問14「他人が私を好いていないとかなずるとき」に対する反応の状況  
(地域間における有意差の存在を\*と\*\*で示す)

Table 10. Responses to Q14 "When I feel that people do not like me"  
(Significant differences between regional groups are indicated by \* and \*\*)

[M]

	Tokyo (city)								
Kochi (city)	—	Kochi (city)							
Iwate	—	—	Iwate						
Akita	—	—	—	Akita					
Niigata	—	—	—	—	Niigata				
Yamanashi	—	—	—	—	—	Yama- nashi			
Okayama	—	—	—	—	—	—	Oka- yama		
Saga	—	—	—	—	—	—	—	Saga	
Okinawa	—	—	—	—	—	—	—	—	

[F]

	Tokyo (city)								
Kochi (city)	—	Kochi (city)							
Iwate	—	—	Iwate						
Akita	*	—	—	Akita					
Niigata	—	—	—	—	Niigata				
Yamanashi	*	—	—	—	—	Yama- nashi			
Okayama	—	—	—	—	—	—	Oka- yama		
Saga	*	—	—	—	—	—	—	Saga	
Okinawa	—	—	—	—	—	—	—	—	

イタリア人の特徴を以前の論文 [祖父江 1977, 1979] から要約して記しておけば次の通りである。

まず問2の「母に対する態度」についてみれば、母への P 反応(親愛感)はイタリア人において最も著しく、Nu(中立的な態度)とNa(反撥)は大へん少ないのであって、彼等が母に対して強い好意的 sentiment を抱いていることが示されている。特にその反応の内容をみれば、「母を抱きしめたい」など母に対する強い emotional な表現があらわれている。日本人の場合もイタリア人に次いで P は多いが、その表現はイタリア人とはやや異なり、いわゆる「甘え」的感情が強くあらわれているのが

表11 問25「それがうまくゆかなかったわけは」に対する反応の状況  
(地域間における反応の有意差の存在を\*と\*\*で示す)

Table 11. Responses to Q25 "I could not do it, because"  
(Significant differences between regional groups are indicated by \* and \*\*)

[M]

	Tokyo (city)							
Kochi (city)	—	Kochi (city)						
Iwate	—	—	Iwate					
Akita	—	*	*	Akita				
Niigata	—	—	—	—	Niigata			
Yamanashi	—	*	—	*	—	Yama- nashi		
Okayama	—	—	—	**	—	*	Oka- yama	
Saga	—	—	—	**	—	*	—	Saga
Okinawa	—	—	—	—	—	—	—	—

[F]

	Tokyo (city)							
Kochi (city)	—	Kochi (city)						
Iwate	—	—	Iwate					
Akita	—	—	—	Akita				
Niigata	—	—	—	—	Niigata			
Yamanashi	—	—	*	—	*	Yama- nashi		
Okayama	—	—	—	—	—	*	Oka- yama	
Saga	—	—	—	—	—	—	*	Saga
Okinawa	—	—	—	—	—	—	*	—

特徴である。これに対してアメリカ人の P は最も少なく、その表現もずっと non-sentimental である。そして Np (逃避) の多いのが特徴で、母親をけむたがって避けるという姿勢の存在していることがわかるのである。なお同じアメリカ人でも白人において特に Np が大きく、黒人では P の大きいのが特徴である。

次に問7の「父に対する態度」をみれば、日本・アメリカ間には有意差がみとめられない。しかしこの両者ともイタリア人との間には有意差が存在するのであって、イタリア人の場合は母の場合と同様、P が最高、つまり親愛感が3つのグループ内では最も強い。但しイタリアの場合でも、母に対するとき比べれば P が低くなってい

表12 日本人と外国人との間における有意差の存在状況  
(上掲5つの問に関して)

Table 12. Significant differences between Japanese and other ethnic groups  
(in responses to five questions discussed above)

	Q2	Q7	Q10(Q3)	Q14	Q25
	Attitude toward mother	Attitude toward father	Attitude toward opposite sex	When people do not like me...	I could not do it because...
{ Japanese Americans	*	—	**	*	**
{ Japanese Italians	**	**	**	**	**

るが、この点は日本人でも同様である。アメリカ人の場合でも白人女性の場合のみを例外として他はすべて同じ傾向を示している。

次に「異性に対する態度」(男子の場合は問10, 女子の場合は問3)においては日本人はアメリカ人, イタリア人のいずれともはっきり有意差を示している。つまり日本人はアメリカ, イタリアに比べて極めてPが少なく, 異性に対するハニカミと消極性が際立っているのである。

問14「他人からの孤立」についてみれば, イタリア人はNp(逃避)が最も大きく, 他人が好いていないとわかれば, たちまち孤独感を抱いてシュンとなってしまうことが示されている。これに対してアメリカ人はむしろNa(反撥)を強く示しているが, 日本人となるとP(親愛)が最も大きいのであって, 他人から嫌われれば, なんとか好かれるようつとめる, 時によっては少しへつらっても相手との関係をよくしようとつとめる傾向が示されている。つまり他人から好かれないことを最も強く気にするという傾向がはっきりうかがわれるのである。

最後に問25「失敗の原因」についてみればイタリア人において圧倒的なのは「忙しかったから」「あまりよく知らないから」「あまりやりたくなかったから」という如きIo(内向・外層)型反応であって, Id(内向・内層)型反応は極めて少ないのである。こうした特色はイタリア人において最も顕著であり, アメリカ人はやや距離を置いてそれに次いでいると言ってよいだろう。ところが日本人の場合はたとえば「それは私が変わったからです」「私の能力がたりないため」などのId型反応が圧倒的多数を示しているのが特徴である。つまり日本人においては, ことの失敗にあたって自らを責める「内罰的」傾向が顕著なのに対して, それは自らの責任ではないのだとする「無罰的」あるいは「外罰的」傾向がイタリア人において最も強く, アメリカ人がそ

れに次いでいると言ってよいだろう。

以上述べてきた概要を示している表12と対照させながら表7～表11をみると、まず指摘できるのは日本人とアメリカ人、そして日本人とイタリア人の間には殆んどすべての項目に関して明確な有意差が存在しているのに対して、日本のなかの異なった地域の間においては、有意差が非常に少ないという事実である。日本のなかの地域差を検討するためにとりあげた項目は5項目のみであるが、これらは全体の中で最も地域差の明確なものを比較の目的のために選んだのであるから、他の項目について比較すれば地域差は更に少なくなることは明らかであり、日本の中における地域差は一般に予想されるよりもはるかに少ないという事実がまず指摘されるのである。

しかしながら、更にこれらの表を注意深くみて頂ければ、地域差の大小は項目によって相当に異なることが明らかである。まず「母に対する態度」(問2)に関してみると、その地域差は殆んどみとめられない。ところが「父に対する態度」(問7)となれば、女子の間においてある程度の地域差が生まれ、次に「異性に対する態度」(問10, 問3)に到ると、更に大きな地域差が生じている(殊に男女とも沖縄県人は他地域と非常に異なった特性を示しており、表4によってみられる如く、著しくハニカミ性であることがわかる)。

しかし次に問14の「他人からの孤立」に対する反応となれば、地域差は殆んどなくなり(特に男子の場合は地域差皆無)、更に問25の「失敗の原因」についての態度をみれば、地域差の比較的大きいことがみとめられる。

このように概観してみるならば、地域差の著しい項目と地域差の少ない項目とをある程度分けることができるのであって、「異性に対する態度」においては地域差が最も大きく、次いで「失敗の原因」「父に対する態度」「母に対する態度」「他人から好かれないこと(孤立)に対する態度」という順序になる。言いかえれば最後の2つは地域差が殆んどみとめられないのである。こうした結果を生ずるに到った原因については種々の解釈を加えることが出来ると思うが、私自身は次のように考えている。

すなわち、日本人のパーソナリティをとりあげてみれば、その中核部分、あるいは最も基層的ともよぶべき部分は全国すべてに共通して存在し、地域差は殆んどみられないことが推定されるのである。私自身は日本人における最も中核的な特性として自己主張の弱さ、あるいは他の表現でいえば「自己不確実性」(uncertainty about oneself)とでも言える点を指摘し得ると考えている[祖父江 1980: 39]。このために、いわゆる個人主義(individualism)は極めて弱く、「他人志向性」(other-orientedness)、あるいは「他人に対する敏感性」といった特性が最も強い。またこうした側面とから

みあい、重なり合って土居健郎の指摘する「甘え」の傾向が著しく、特に母親との間における「甘え」関係、「相互依存関係」(mutual dependency)が顕著なのである[祖父江 1973]。

ここにあげた諸特性がすなわち日本人の最も基層的な特質であり、まず「母親に対する態度」においてはアメリカ人、イタリア人などに比べてその特徴(「甘え」の態度など)が著しく示され、他方、国内における地域差は殆んどみられない。つまり、こうした日本人の基本的特性は相当に古い時期から存在していたものなのであり、時代の推移によってもあまり変化することなく続き、したがって同じような特質が全国一様にひろがったと考えてよいのではないだろうか。

次に「他人からの孤立」についてみると、Pがイタリア人、アメリカ人に比べて著しく大きく、他人から好かれなければそれを気にして好かれるよう努める傾向が顕著に示されているのであるが、これについての地域差は全体のなかでも最も少なく、特に男性の場合に全く地域差がみとめられないという結果を示しており、この特質が全国に共通して存在することが推察されるのである。

以上のような日本人パーソナリティの基本的中核部分に地域差がみとめられないのに対してパーソナリティの表層部に近くなればなるほどずっと可塑性があって変化し易く、同じ日本のなかにおける文化的環境の地域差により、ある程度の、ないしは相当程度の地域差を生み出しているのではないかというのが私の考察である。そして例えば女子の間では「父に対する態度」の方が「母親」の場合に比べてずっと地域差が大きいのはこのためではないかと私は考えている。上述の通り、母親に対する心理的態度の方は時代の推移によってもあまり変化せず、以前から本質的には同じであり、したがって同じような特質が全国一様にひろがっていた。これに対し父親に対する態度のほうとなれば状況は異なり、かつての権威主義的な父子関係は第二次大戦後、急速に消え去ってしまった。それに代って生まれた新しい父子関係は世代間変異に加えて、家庭での変異、そして更に地域の変異が母子関係の場合と比べて顕著なのである。なお父子関係、母子関係とも男子の場合に殆んど地域差がみられないのに対して、女子の場合に地域差のずっと大きくなっているのは注目すべき点である。

次に「異性」に対する態度となれば、その地域差はここにあげた諸項目のなかでは最も著しい。日本全体を通じ、第二次大戦の終までは異性に対する愛情の表出を抑制するのが一般的慣習であった。これは江戸時代以来の儒教的思考様式の圧力によるものであったが、戦後になってアメリカの影響が強くとく入ってくると儒教的な考えははだいにくずれ、その結果、異性に対する態度は都市と村落の間の差をはじめとして、相

当の地域差を示すことになったのであろう。

なお最後に「失敗の原因」についてみるならば、全体として Id 反応が極めて多く、「内罰的」な傾向が強い。こうした傾向は既述の「自己不確実性」と明らかに関連し合うものであって、「自己主張」「自己の立場の主張」などの弱さと結びついていると考えられ、またいわゆる「自己卑下」の傾向にもつながるということも出来よう。その点からみれば、これもまた基層的な特性だと考えられるのであるが、それでいてこの特性の地域差が案外に大きいという事実をどう解釈するのか更に検討すべき問題だと思われる。

#### 4. 県民性をめぐる基本的問題

私はかつて県民性についての著書 [祖父江 1971] を公刊したが、これに対して我妻洋は「同じ日本の中において県民性や村民性といったものは実際には存在しない、一見して県民性の如くみえるものは、実は地理、経済、制度などの条件の相違による行動様式の相違であって、それぞれの地域や県のモーダル・パーソナリティにはなんら差がないのではないか」と批判を述べている [我妻・原 1974: 226, 278, 283]。この点はまさに「文化とパーソナリティ」の分野における基本的な問題に他ならないのであるが、この点については私自身の意見をすでに他のところで述べている [祖父江 1976: 365-368] ため、ここでそれを再度記すことにしよう。

すなわち私自身は県民性を「いわゆる県民性」ということばによって表現して把握することにしてている。この理由は、日本で一般に県民性がうんぬんされるとき実はその内容の範囲が非常に広いにもかかわらず、その点を考慮せず、極めてアイマイに使われることが多いからである。すなわち、一般に「県民性」とよばれるものの第一は単なる「イメージ」としての存在である。「××県の人はこちらである」と普通に考えられ、一般の人びとの間でうんぬんされているステレオタイプ化したイメージとしての存在である。実際のところイメージとしての県民性は「いわゆる県民性」の中の極めて多くの部分を占めているし、それらの中には単なるイメージに過ぎない場合が少なくないのである。ここで「イメージにすぎない」ということは、そのイメージが「実像」ではなく、「虚像」にすぎないという意味である。この場合、かつては実像であったものが時代と共に変化して、今は虚像になっているものも少なくないといっただろう。

次にこのイメージが虚像ではなく、実像である場合が第2の種類であるが、このと

きは厳密にいうと更に2つの種類を分けることができよう。まず第一はその実像がその地域における「期待される人間像」ないし「期待される行動型」にすぎない場合である。そうした場合のすべてではないが、多くのケースにおいては、ある特別な状況（例えばその地域の人びとが集まって、しかもその地域の人びとの特色を外部に示したがる、ないしは誇示したがるようなとき）に限って、あるいはごく一部の人びと（老人などの如く限られた年齢層あるいは商人とか職人などの如く特定の職業の人びととか）の間においてだけそれが守られるというようなケースが少なくない。そうなる、これはその地方の実像ではあるが、ごく一部の行動様式にすぎないということになる。なおこうした場合、「ごく一部」に限らず、他の人びともその「理想型」に影響され、それを意識して行動する場合が相当多いように思われる。但しいずれにせよ、そこにみられるものはその地方の「行動様式」にすぎないのである。

しかしながら実像における第2の場合として次に考えなければならないのは、それが単に行動様式にとどまるだけでなく、更に内部のパーソナリティの部分における特性となっている場合である。さきにも述べたように、我妻はこうしたパーソナリティの部分における地域差の存在を、はじめから全面的に否定しようとしているのであるが、しかし私の文章完成法テストの結果にみる限りでは、僅かとは言え、パーソナリティ特性の地域差が明確にみとめられるのである。私自身のこのテストのデータの他にも、NHK が全国的規模で行なった意識調査の結果には明らかに地域差が存在している [NHK 放送世論調査所 1979]。

しかしながら私自身のテストの結果においてもその地域差は、ふつうに予想されるよりははるかに少ないのであり、ある特性についてはその地域差は殆んどゼロに近くなっている。その限りにおいて、県民性の存在を過大視することの危険性を指摘する我妻の主張は極めて正しいと言えよう。なお私自身は日本人パーソナリティの基層部とも言える部分においては地域差が極めて少ないか全く存在せず、表層部とも言える部分においては地域差が大きいのではないかという仮説をたててみているのであるが、ここにあげた文章完成法テストの結果だけではそれを完全に論ずることはまだ到底できないように思われるし、事実、ここにあげた私のテストのデータの場合でも、私の仮説に必ずしも一致しない結果の生まれている部分があるのは先にも記した通りである。

なお更につけ加えれば、私のいうパーソナリティの中核・基層部と表層部との間の境界線はどの辺に位置するのか？ 更にはこの表層部と行動型との間の境界はどの辺なのか？ またそれは果して明確に存在しているものなのか？ こうした諸点になると

まだ不明確であって、ただ便宜的なスキームを仮に定めて考えているにすぎないとも言える。今後の研究によって、これらの問題点が明確にされることを期待したいのであるが、こうした構造的把握を日本人パーソナリティの地域差にあてはめて考えていこうとする私の立場を更に進めるためには、文章完成法テストの他に、他の態度調査やプロジェクトヴ・テスト（特にロールシャッハ・テストその他）の結果にあらわれた地域差の分析が必要なのであるが、現在のところ、この目的に使い得る資料は残念ながら極めて乏しい状態にある。したがって本稿は現段階における一応の中間的報告と考えて頂きたいのであるが、しかし少なくとも文章完成法テストのなかの上記5つの項目に関連するパーソナリティのさまざまな部分については同じ日本人の間にもなんらかの地域差がみとめられるという事実。そして先に記した如くパーソナリティのある部分については地域差が少ないが、ある部分については地域差が大きいという事実。但し全体としてはその地域差は一般に予想されるよりはるかに少ないという事実。……こうした諸点については、明確に結論することができると思う。

## 文 献

NHK 放送世論調査所（編）

1979 『日本人の県民性：NHK 全国県民意識調査』日本放送出版協会。

祖父江孝男

1969 「文章完成法テストよりみた日本人のパーソナリティ：米国人との比較および地方差の検討を中心として」『臨床心理学研究』8(2)：65-77 ([祖父江 1976：252-275] に再録)。

1971 『県民性：文化人類学的考察』（中公新書）中央公論社。

1973 「日本人の国民性における連続性と変化」祖父江孝男編『日本人はどう変わったか』（現代のエスプリ 69）至文堂，pp. 5-32。

1976 『文化とパーソナリティ』弘文堂。

1977 「文章完成法テストよりみたイタリア人のパーソナリティ：日本人およびアメリカ人との比較分析」『国立民族学博物館研究報告』2(1)：1-13。

1980 『日本人の国民性』（生涯教育新書 22）富山県教育委員会。

SOFUE, T.

1979 Aspects of the Personality of Japanese, Americans, Italians and Eskimos: Comparisons Using the Sentence Completion Test. *Journal of Psychological Anthropology* 2(1): 11-52.

我妻 洋・原 ひろ子

1974 『しつけ』（ふおるく叢書 1）弘文堂。